連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第36回

マーティン・モリス氏（建築史家、千葉大学名誉教授）
――国際的建築史として日本の建築物を研究教育

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼人生は意志か偶然か？

英名マーティン・モリス（Martin Morris）博士は、今年、千葉大学を定年になり名誉教授となった。英国出身で日本に来てすでに38年になる。定年を機会に英国に帰る準備もしているが、日本での長い研究生活で蓄積した研究資料の整理や日本でやりたいこともあり、また半年は授業も持つことになりすぐには旅立てない。英国の実家の管理やこれまでの研究実績を英語で世界へ伝えるには、帰国した方がいいかなと、考えているという。こうした状況にあるモリス氏には、筆者からも継続してお願いごとをすることにした。一つは、後述する国際善隣協会でのオンライン講演（実施済み）と論文の寄稿であり、もう一つはこのコラムでの紹介である。なお、さらに古民家再生についても意見を求めたいと思っている。

モリス氏の表情をよく伝える写真

モリス氏と筆者とは、千葉大学の工学部や大学院で、同氏は建築、筆者は都市環境システムと、所属する学科は異なったが同僚であった。そもそもは、都市環境システム学科に所属する学生が、夏季休暇中にモリス氏が行う建築史野外研修（京都・奈良方面）に参加し、その縁を通じてモリス氏と関わりをもった。その後、筆者が受諾した国交省の地域創成事業の「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」において、同氏に専門の歴史建築の調査を研究委託し、展示とプレゼンをやって頂いたことが縁で、関係が深まった。

また同氏の取り組みである千葉県一宮町の寿屋本家の建築史の調査研究は、前述のエコミュージアム活動とも重なり、さらに関係が深まった。

しかし、ここで記述したいのはモリス氏の研究紹介のほか、人柄や性格、真面目さや一途さであり、本来では日本人が持たなければならない人情についてさえ思い起こさせてくれる。それは、建築の歴史や保存という研究実践は、現代における短絡的&刹那的な発展を美化する風潮に対するもので、古民家再生や伝統的歴史建築についての大切さを教えてくれる（後述）。

▼プロフィール

モリス氏は、1956年にケンブリッジの北の造園業を営む家庭に生まれた。16世紀に遡る家系であるらしい。父親はケンブリッジで建築事務所を経営していた。ケンブリッジ大学建築及び美術史学部卒業、修士まで終えた。その後、来日し東京大学大学院で工学修士、工学博士（1995）。千葉大学工学部&大学院で講師、助教授、准教授、同教授、2022年3月定年退職。現在名誉教授と、千葉大学の資料からは引用略記できる。

ケンブリッジ・トリニティカレッジの東京クラブがあり、その講演動画からは、次のような背景が知れる【註1】。

ケンブリッジ大学に入学し、はじめは歴史を専攻していたがその後、建築に転向した。1979年に、同大学建築及び美術史学部卒業した。その後、地元の建築設計事務所に就職したり、1982年にケンブリッジ大学の建築学のディプロマを取得、翌年には大学院修士の学位を取得した。この間に、建築の歴史、とくに歴史的建築物の保存に関して研究した。また、ケンブリッジに英語を学びに来ていた日本人女性と出会い、結婚したことも関係し、日本の伝統建築、特に都市における固有な家屋といえる日本建築の「町屋」についての研究を深めることになった。

モリス氏は、1983年に東京大学の研究生になり翌年には修士課程に入学し、その後、博士課程に進学した。この間は奨学金を得ていたが、途中からは自活し研鑽を重ね、1995年に博士の学位を取得した。そして、町屋の住居形式を基礎に置く日本の様々な階層での住宅の発展過程についての建築学史に関する学会講演を果たし、1996年には千葉大学の建築史の講座に講師として就職した。助教授、准教授を経て、2007年に教授、2022年、65歳となり定年。この間、一貫して町屋に代表される都市における特徴的な建築物の成り立ちや構造と特徴、建築としての価値について、東洋と西洋の建築の歴史的発展における類似と相違とその意味について、比較文化的な観点から研究を行っている。

これは、英国研究者がとらえる建築史の視点としてはユニークなものとなる。

▼建築史学の役割と重要性

モリス氏は、2022年3月に定年退職を記念に研究成果をまとめるオンライン最終講義を「建築史学の役割と重要性」と題して行った【註2】。その講義では、建築史学の位置づけについて語られた。

モリス氏は千葉大学で26年間、世界建築史、日本建築史、建築の保全と再生、住宅史、建築デザイン基礎などの講義を担当した。日本の伝統的な建築を英国人が研究教育したことに特徴がある。それは既述のように日本の建築にとどまることなく世界の視野から行われたことに特徴がある。

建築史学は、文系の歴史の一部ではあるが、歴史&建築である。まず、歴史とは？と問い、「時空間（空間と時間）の変化」であるとした。しかし、人間の存在は、文明や文化により、「遺伝子を超えた変化」を行う。すなわち、遺伝による変化から「文明による変化」を行う。そのツールは、言語と文字であり、歴史とは、過去に関して残された記録や証拠の分析であると・・。

しかし、人間は事実を知るだけでは満足しない。「発展の過程の理解とその評価」を目指す。結果、「情報＋知識」（Information & Knowledge）が歴史といえる。

建築と建物との違いは難しいが、建築は建築家の作品で、建築家とは「大工」。建築の長の作品であるという。そして「建築史学」の役割についてモリス氏は、次の4つに分けて説明した。

①過去に光を当てる歴史的資料として

②歴史的建築の保全を起こしたり、支えたりする分野として

③設計における前例の宝箱とデザイン進化のための媒体として

④何が可能だったのかを思い出させるものとして

第1の柱は、建築は時代を象徴する建物として意味づけである。

例えば、明治維新の時には洋風建築が国造りの象徴としてつくられた。同様に、奈良時代のまちづくりは中国の都市をモデルとした。これは、自己イメージ（Self-image）として、時代を超えて「建築の歴史」を知ることができる。

一般の居宅についても同じことがいえることをモリス氏は、自身の建築史の原点として挙げている。それは、「町屋」であるが、通りに面して住居と使用人が住める商業建築である。

モデル住宅や建築の普及には、基本タイプがあり、その上層（上級）住宅内に庶民住居の建築が付属屋として含まれていた。この発展は経済や資産規模と連携はしているが、基本的なモデルとして理解できる。

同様なモデル的な変遷は、都市居住／居宅において、イタリア・フランス・ドイツ・イギリスでも見られるという。

このような分析は、建築史学を学んだ建築家こそが、自己理解として建築の発展を正しく評価できる可能性があり、建築史学の重要な役割である。

第2の柱は、歴史的建築の保全についてである。

直接的、間接的な取り組みとして紹介された。

□直接的な支え方

歴史的建築を記録・調査することで、これは前述した学生を伴っての調査活動も含まれる。モリス氏が重視しているフィールドワークである。

同時に、歴史的建築の保全学と修復技術の適用が重要となる。

□間接的な支え方

「建築の保全と再生」という授業で、「重要文化財建造物の日英比較」として、国指定の重要文化財と国宝　登録文化財伝統的建造物保存地区などの比較を知る機会になった。

直接・間接に関わらず保全や再生において著者が初めて知ったのは、イギリスでは、中世に対するあこがれが、産業革命に対す反動についてである。結果、「ゴシックルネサンス」、あるいは「バナキュラーリバイバル」という文化が起こった。提唱者は、ウイリアム・モリスで、SPABという組織で、伝統建築を保存する組織活動であった。これは、別の言い方では、〈生きている歴史〉"Living History"としての活動であり、愛着が歴史への憧憬としてある。それは、建築においても中世への愛着である。

▼わが国での保全の例

モリス氏が力を入れたわが国での古民家再生の例としては、写真に掲げた千葉県一宮町の斎藤家住宅（旧寿屋本家、明治中期の店蔵住居）がある。これはモリス氏の研究室のほか、地元の志田信子氏（町会議員）とNPO法人 さすが一の宮、またMOBA建築研究所の協力で行われたものであった。複数年度での本格的な建築学史調査が行われ、現在、地元のNPOによりカフェやイベント会場として運営&利用されている。

再生された旧寿屋本家（千葉県一宮町）

▼善隣協会でのオンライン講座

2022年5月には、国際善隣協会でも講演して頂いた。この協会は、日本とその隣国との関わりを主眼としているので、千葉大学の学生向けの講義の「日本建築論」を素材にして一般の受講者にお話しして頂いた。日本の建築や住居における発展の歴史を、とくに近世以前の日本建築における日本独自的側面、中国等からの派生的側面についての分類と比較についてお話して頂いた。

▼学び

今回、このコラムを書くにあたりモリス氏との意見交換で有益な想起がなされた。それは、次のようなことであり、一部には気づきや伝統としてなされていることではあるが、明解である。

モリス氏は、これまでの過去においても、人間は工夫し、まぁまぁの日常生活水準を可能にしてきたことに、価値を見出すべきとの意見である。その視点は筆者も重要であると考えている。これは筆者の「自然と至然」の提案にも一致し、自然との共生を重視したい【註3】。日常の暮らしや活動においては、長野県の軽井沢や御代田には、つぎの方言がある。「なから」という言葉である。

「なから」は、「ほどほどにしようよ」、「まぁまぁ」でいいということで、例えば、「今日の仕事は、〈なから〉で行こう…。」などの使い方である。

千葉大での元同僚でいまは故人となった延藤安弘先生の提唱していた「まちの縁側」というコンセプトを引き継いで御代田町の斎藤百合子氏は、NPOの名前に「なから」を用い、〈NPO法人まちの縁側なから〉を運営している。筆者はこのNPOに「地域での防災食の普及」の活動において協力して頂いている。

また、御代田町には、スウェーデン語の「ほどほど」という意味のLagomという言葉を付けたインテリアショップ Lagomがある。これも、「まぁまぁ」や「なから」に相当する感覚であると思う。モリス氏から頂いたコメントは、歴史研究から、また英国人の血流としての意見であるかとも思う。短期的目線や哲学的視点に疎い一般の日本人の反省点ではないかと知らされた。

コロナで気づかされた分散型の暮らしは、地方の建築の再生を可能にする経済的な仕組みとともに愛着と価値の創造への気づきは、モリス氏の建築史学の4つ役割がヒントとなるし、重要な課題解決のアプローチとなるといえる。歴史は生きているのである。

【註1】 On Japanese Traditional Architecture and its history、2022年5月、http://www.eng.chiba-u.ac.jp/outProfile.tsv%3Fno=1063.html

【註2】 「建築史学の役割と重要性」2022年3月 https://www.youtube.com/watch?v=krLPCtqHdbs

【註3】 「自然と至然」―自然と共生するアプローチ、『環境管理』2021年3月